

ている児童は、特に案ずる必要はないと思います。いつ、どこにいても、幼いころから日常的な人との交わりを通して、体験的に身に付けるべき基本的な生活習慣や道徳的な判断力、公共心、対人マナーが育まれている児童は、その児童なのりの、時と場に応じた適切な行動をとっているからです。

児童館の大変さは、一般的にはさほど問題視されていませんが、やはり関係者の間では切実な問題になっていくそうです。児童館は、程度の差こそあれ、子どもが学校や家庭とは明らかに異なる一面を表出する場で、来館時間は、現代っ子の課題が一日の中で最も浮き彫りになる時間帯と申し上げても過言ではないのかも知れません。

児童が、学校や家庭でできることが児童館ではできない、また、学校や家庭でやらないことを児童館ではやる、という現象の要因及び背景として、次のような点が挙げられているそうです。

○学校と家庭の中間にある「放課後」は、解放感や心身の疲労などから子どもの「心のたが」が緩んで、気持ちが高ぶり、子どもが、目に見えない何かに突き動かされるようにはしゃぎ、抑圧された不安や不満、苛々などを我が儘に表出する時間帯である。

○「学習指導要領」に基づいた、「学び」を中心とする学校教育に対して、児童福祉法で定められた児童福祉施設である児童館は、主に健全な「遊び」を通して、児童の健康増進と情操を豊かに育むことを目的としており、集団としての規律と秩序を保つことが難しい。

○関係機関の緊密な連絡調整が不十分のため、「児童館任せ」になってしまい、児童館と家庭、学校、専門機関が日常的に協力し合って、児童を継続的に見守り、育てる連携が実現し難い。



以上のような他市町村の児童館の大変さを耳にするにつけ、立科町児童館の頑張りや頭が下がる思いを抱きます。

と申しますのは、立科町児童館は、和やかで、温かい雰囲気漂っているから

です。児童が安心して過ごせる居場所が確保されているからです。集団としての規律と秩序が保たれているからです。そして、児童の苛々を合理的に発散させる「放課後」になっているからです。

これは、偏に厚生員の方の誠実な頑張りや負うところが大きいと思います。厚生員が、日々、児童一人一人に温かく接して、児童の声に親身に耳を傾け、いけないことはいけないと毅然と指導することによって、厚生員と児童の信頼関係が築かれているからこそ実現している姿と思います。

「子ども未来館だより6月号」に、「放課後ということで緊張感が薄れ、友だち同士のトラブルが生ずることも多々あります。」と述べられているように、立科町児童館にも児童館の大変さの要因や背景は山積しています。また、より充実した児童館活動及び安全確保などの課題も、他市町村の児童館と共通しています。

したがって、立科町児童館においても、「うるせえ、くそばあ！」といった言葉が飛び交う要素は数々あります。にもかかわらず、そのような言動が実際にはほとんどないことに心からの敬意を覚えます。

立科町児童館には、一日平均70名以上の児童及び乳幼児、保護者が集います。

「広報たてしな」に折々掲載されていますが、幼児対象の「ちびっ子広場」や「たまご広場」、児童対象の「文化伝承（囲碁・将棋）教室」や「わくわく教室」、そして、親御さん対象の「子育て講話」などの行事も充実しています。

歴史的な大雪が褐色の塊と化して路側帯のそこかしこに残る今年の2月下旬、たてしな保育園副園長（当時）の中谷秀美先生と子育て相談員、土屋正一先生の「子育て講話」を拝聴する機会がありました。乳幼児期における子育てのポイントや留意点などのお話を伺いながら、幾つもの思いが頭の中を駆け巡りました。

専門の方の、体験に裏付けられたお話は具体的で、とても参考になる……。若い親御さんにとって、まことに有難い研修の場であり、また新たな気持ちで子育てに励もうという元気が湧くのではないか……。

もっとも多くの親御さんに聴いていただき、一緒に考え合いたい……。立科町児童館の「子育て講話」は、非常に充実している……。

「人は、ともすると身近なものを身近であるが故に軽んじ、その価値に無頓着である。」

立科町児童館の誠実な頑張りや接するたびに、そう思います。